

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520570

研究課題名(和文)本四架橋全通と市町村合併にともなう環瀬戸内海方言の変容

研究課題名(英文)Geographical and social studies of the Seto Inland Sea dialects

研究代表者

村上 敬一 (MURAKAMI, KEIICHI)

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・准教授

研究者番号：10305401

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、現代日本語方言の地理的分布と世代差、方言に対する意識を明らかにすることを目指し、環瀬戸内海地域を中心に方言調査を行なった。具体的には、高校生を対象としたアンケート調査、中、高年齢層を中心とした談話資料収集である。高校生調査については、データ集を作成し、考察を付している。談話資料集については、文字化を進め、テキストとして保存するとともに、標準語訳と文法・語彙の解説を付している。

研究成果の概要(英文)：In the present study, the investigation of actual conditions of dialect was executed paying attention to the geographic and age movements and the dialect consciousness on the Seto Inland Sea region. Specifically, the questionnaire survey of high school students and the discourse collecting data with a focus on middle and upper age bracket were carried out. The results of the high school students study was summarized in data collection. Based on the survey results that target the middle upper age bracket, created a discourse sourcebook, and saved as text books.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言 瀬戸内海 方言談話 若年齢方言

1. 研究開始当初の背景

現代の地域方言研究は、地域の変異に注目するだけではなく、世代・性・職業などによる社会的変異、さらには言語変化を推進する人々の意識や志向にも注目が集まっている。方言の地理的な分布を表す方言地図は、言語地理学的情報(地域の変異)を示すものであり、地域差と世代差を同時に示すことのできるグロットグラムは、そこに「世代差」という社会言語学的情報(社会的変異)を同時に提示することで、新しい方言研究のあり方を示した。グロットグラムの応用形として、統計的に処理した調査結果を分布地図として表すという手法もある(陣内 1985)。また柴田武(1995)では、社会言語学的情報と方法を言語地理学に取り込むという、両科学の技術的な統合についての提案がなされている。

グロットグラムを取り入れた実践は、平成20年度～22年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究課題九州新幹線の開通と市町村合併にともなう九州方言の変容を先駆けとした。この実践を踏まえ「交通網再編」と「市町村合併」という共通の社会的背景を持つ、環瀬戸内海地域を調査フィールドとする調査研究を継続すべく今回の研究に至った。

今回の研究のフィールドとなる環瀬戸内海地域では、1988(昭和63)年4月10日に児島・坂出ルート「瀬戸大橋」が開通し、鉄道と自動車専用道で本州と四国が初めて結ばれた。10年後の1998(平成10年)4月5日には神戸・鳴門ルート「明石海峡大橋」が開通し、四国東部と関西圏との移動の利便性が向上した。1999(平成11年)5月1日には尾道・今治ルート「しまなみ海道」が全通し、ここに本四架橋がそろい踏みすることとなった。

地域交通網の再編は、当該地域に居住する

人々の生活、社会的状況、そして地域方言の変化にも大きな影響を与えている。橋の開通は、航路の再編、高速バスの新設、物流ルートの改編など、人やモノの流れを大きく変える。本州側の方言と四国側の方言同士の直接的な接触、干渉が起こり、環瀬戸内海地域方言に、大きな変化の生じることが予想される。

申請者は、10年ほど前から淡路島、香川県東讃・中讃地域、しまなみ海道沿いで継続的に調査を実施し、結果をまとめてきた。

今回調査との比較を行なうことで、この間の変化を観察することも目指した。

2. 研究の目的

社会言語学においては、言語伝播の主要な経路として鉄道や主要幹線道路を取り上げることがある。

環瀬戸内海地域においては本四架橋3ルート(児島・坂出ルート)(明石・鳴門ルート)(尾道・今治ルート)の全通によって地域交通網の再編が進み、地域に居住する人々の生活、社会的状況、そして地域方言の変化に大きな影響を与えることが予想される。橋の開通は、航路の再編、高速バスの新設、物流ルートの改編など、人やモノの流れを大きく変えた。本州側の方言と四国側の方言同士の直接的な接触、干渉が起こり、環瀬戸内海地域方言に、大きな変化の生じることが予想されるのである。

申請者が10年ほど前に行なった調査結果と、今回実施した調査との比較を行なうことで、この間の変化を観察することが本研究のひとつの目的である。さらには、当該方言の実態を「九州新幹線調査」の結果と比較することによって、方言変化の普遍的なモデルの構築も視野に入れた。

3. 研究の方法

若年層では、アンケート調査、中・高年層は場面をあらかじめ設定した談話収集調査を中心に実施した。

若年層方言の動態を明らかにするために実施したのは、高校生、大学生を対象としたアンケート式の調査である。具体的には、現代日本語方言の地理的分布と世代差、方言に対する意識を明らかにするための調査である。

調査の対象となったのは、広島県、香川県、徳島県、愛媛県の12校である。約100の調査項目について、エクセルを用いてデータを電子化し、図表化を進めた。

若年層への調査を進める中で、方言習得や、その背景にある方言意識について深める必要が出てきた。そこで、方言の習得（第二言語としての日本語教育における方言獲得）とその背景にある方言意識について、日本語学習者である台湾、韓国の留学生を対象とした日本語・方言に対する意識調査を行なった。日本語習得における方言の実態、それを支える方言意識についての日本と台湾、韓国の比較である。

中高年層については、昔話の翻訳調査と、道教え談話を使った談話の収集を中心に行なった。対象となったのは、香川県と徳島県の中高年層である。環瀬戸内海地域を中心に、方言の広域的な動態を把握するために、兵庫県と熊本県でも同様の調査を実施した。

収録した談話資料は、文字化ののち、標準語訳を行なっている。また、得られた談話資料を基に、文法の解説と特徴的な語彙の解説を目指している。一部の談話については、実際の音声も合わせて採録することで「文法書」「辞書」「音声データ」の3点セットを構築する。

4. 研究成果

若年層（高校生・大学生）の調査結果については「高校生・大学生と瀬戸内海方言」(仮題)を作成中で、2014年度には公開したいと考えている。一例として下の図1は食べ物が脂っこいことを何とというか、徳島県内の高校生の結果をみたものである。

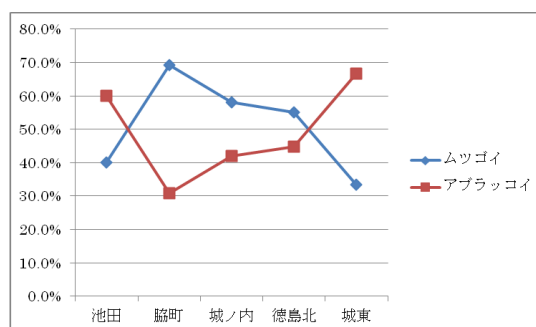


図1 「脂っこい」(徳島県・高校生)

県西の池田高校と、徳島市内中心部の城東高校で、共通語形の「アブラッコイ」が多い。吉野川中流域の脇町高校で、方言形「ムツゴイ」が最も多くなる。池田高校のある三好市は、県西部に位置するも四国の交通の要衝である。他県との交流のしやすさが、若年層での共通語化の背景にあると思われる。

中・高年層調査については、談話の文字化が完了したので、標準語訳と、文法・語彙の解説を進めているところである。音声データの追加収録とともに、やはり2014年度中の公開を目指している。熊本県で採録した昔話のデータは、被調査者の好意もあって、大きなものとなった。時間はかかるが、分析を進めていく。採録できた昔話の一例は、以下の通りである。

《徳島県》

ひょつとこらしよ、寺を救ったクマンバチ、
狸の火事真似、継子の栗拾い、おせんとこ
せん、食わず女房、祠のタタリ、引野の天
神さん

《熊本県》

へそがまん、ガス灯とよぼり、ウナギとダム、とうさし、かしぼり、タカンボバチのだご、タレスと氷、など

台湾・韓国の留学生に対する調査は、比較的順調に進み、台湾での学会発表と、論文にもつなげることができた。一例として、図2は、関西地方の大学に短期留学した、日本語を学ぶ大学生の方言意識をみたものである。

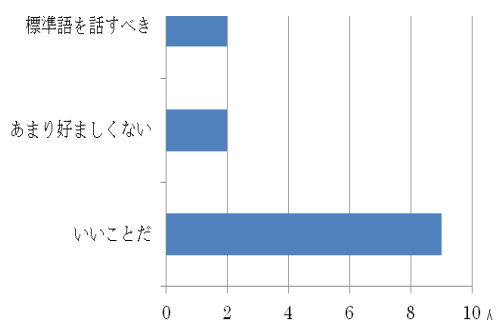


図2 留学生が方言を話すことをどのように思うか

回答者は、短期留学の中で、同世代の大学生の関西方言に直接する機会を得た。方言が、日常のコミュニケーションの中で重要な位置にあることを経験し、方言に対しても肯定的な意識を持つようになってきていることがわかる。

日本語母語話者にとっても、第一言語の中の方言習得と関わる。日本語学習者の、第二言語としての言語習得、方言習得と合わせて、今後も継続して調査を行なう必要性を痛感している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

村上敬一「日本短期研修を通じた日本語習得と日本語に対する意識 - 台湾の日本語学習者を例として - 」『言語文化研究』第21号 査読有 2013 pp.107-120

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/bulletin/litj.html>

〔学会発表〕(計 6 件)

村上敬一「SNS を利用した相互交流・異文化理解とその応用 - 台湾と日本の大学生に見られる事例から - 」2014年応用日語国際學術研討會・育達科技大學(台湾) 2014.5.29

村上敬一「日本短期研修の経験を通じた日本語の受容 - 台湾及び韓国の日本語学習者を例に - 」2013 語文教學國際學術研討會・育達科技大學(台湾) 2013.10.8

村上敬一「兵庫県方言文法の概観 - 全国共通語および周辺方言との比較・対照において - 」2012年応用日語學術研討會・育達商業科技大學(台湾) 2012.5.23

村上敬一「鶴岡方言と九州方言」理論・構造研究系プロジェクト研究成果合同発表會・国立国語研究所(東京都) 2012.2.19

村上敬一「交通網再編と地域方言の変容に関する事例研究 - 本四架橋・九州新幹線沿線をフィールドとして - 」第146回変異理論研究会・大阪大学(大阪府) 2012.1.22

村上敬一「地域交通網の再編と市町村合併にともなう方言の変容」2011年応用日語學術研討會・育達商業科技大學(台湾) 2011.5.27

〔図書〕(計 1 件)

村上敬一・岸江信介ほか『県別罵詈雑言辞典』(東京堂出版) 2011 総 379 頁(村上: pp.180-188 岸江: pp.106-109,154-166)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

村上 敬一（MURAKAMI KEIICHI）

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・准教授

研究者番号：10305401

(2)研究分担者

岸江 信介（KISHIE SHINSUKE）

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授

研究者番号：90271460

(3)連携研究者

なし